

# 新聞新報

2008年(平成20年) 1月16日 水曜日

## 大学・消防・自衛隊も支援

### 各地で訓練 キーワードは「鍛える」



図面を見ながら仮設トイレを組み立てる高校生(静岡市駿河区の長田西小学校で)

東海・東南海・南海地震など巨大地震で大被害が懸念されている地域では、「鍛える」が防災教育キーワードになりつつある。

今世紀の半ばにも発生する恐れがある東南海・南海地震で、大被害が懸念されている和歌山県。2004年から毎年夏休みに「高校生防災スクール」を開いているが、その開催のきっかけは、地域の高齢化だったという。昨年3月末現在で県内の65歳以上の割合は24・6%と全国平均20・8%を上回り、近畿圏で最も高い。リーダーを育て、地域の先頭に立つてもらおうのが「スクール」の最大の狙いだ。

和歌山大や消防、自衛隊な

ども積極的に支援、炊き出しや救急対応訓練などに加え、避難所運営訓練にも取り組み。昨年からは各校に人数を割り振るのをやめ、「やる気のある生徒」を募った。参加者は前年の約1300人から約700人に減ったが、訓練の密度は格段に濃くなった。

「まずは机の下に隠れるんじゃないの?」「いや、30秒あるなら校庭に逃げられる」。愛知県立刈谷東高校で、昨年12月25日に開かれた県教委主催の「地震防災フォーラム」に参加した高校生たちは「生き残るためにはどう行動すべきか」をテーマに意見を戦わせた。

想定は、紀伊半島沖で巨大地震が発生、「震度6強の揺れ」まで30秒の緊急地震速報が「流れた」。参加者は、グループごとに考えた対応方針を発表するのだ。

その発表を土台で支えるのは、半年前に開かれた「高校

生防災セミナー」で学んだ防災知識。夏に開かれるセミナーは、10校から生徒4人と教諭1人がそれぞれ参加、名古屋大で講義を受け、阪神大震災の教訓を伝える「人と防災未来センター」(神戸市)で学ぶ。セミナーで学び、フォーラムで力を試す。二段構えで防災力に磨きをかける。

静岡市駿河区の長田西小学校で昨年12月2日の日曜日に行われた自主防災組織の訓練の参加者は約850人。このうち約400人は地元の中高校生だった。

12月第1日曜日は、1994年12月7日に起きた昭和の東南海地震にちなみ県独自の「地域防災の日」。県内全域で訓練が行われるが、県教委

は02年の防災教育基本方針で中高生を防災の「戦力」と位置づけ、訓練への参加を促してきた。

06年12月の公立校の参加率は、小学生21%、中学生47%、高校生49%……。中でも高校生の参加率は、03年の6%から大きく伸びた。05年から「参加証」に自主防災組織のサインをもらって提出させたり、一部の学校では参加しなかった生徒にリポートを提出させた。地域を挙げて自覚を促す試みが続いている。